

司祭団から

永遠の命

主任司祭 松本 勝男

主のご復活おめでとうございます。

今年は、新型コロナウイルス流行のため、公開のミサができない、教会での活動ができないという異例の事態での復活祭になってしまいました。しかし、このような厳しい状況にあるからこそ、イエス様が十字架上で亡くなり三日後に復活されたというメッセージを、私たちはより深く味わうことができるのではないのでしょうか。いつのことだったか、どんな状況のことだったか忘れてしまいました。母にキリスト教の魅力は何なのかという旨の問いかけをした時、「だって永遠の命がもらえるんだもん」という答えが返ってきました。「死んでもなお命がある」ということです。ひよっとしたら、その時にイエス様の死と復活のことについて

いろいろ話を聞かされたのかもしれないが、よく覚えていません。ただ「永遠の命」という言葉だけは、今もおお強く印象に残っています。

そんな母が帰天してまもなく一年になります。きつと母は大好きなイエス様やマリア様の下で「永遠の命」を享受していることでしょう。苦学の末に幼稚園教諭の資格を取り、また短大在学中に受洗の恵みを受けた母が、その後の人生を教会と幼稚園のために捧げたことを思う時、母はイエス様が十字架を通して示してくださった「永遠の命」の希望に生かされながら、喜怒哀楽に満ちた人生を全うしたのではないかと思わずにはいられません。

ルカ福音書24章に収録されているエマオへ向かう二人の弟子の物語は、主の食卓である聖体祭儀（ミサ）が復活されたイエス様と出会う場であることを教えてくれます。み言葉を聞き、イエス様の体であるご聖体をいただく時、私たちは「永遠の命」への希望を新たに、新しい一歩を踏み出すことができるのではないのでしょうか。

「永遠の命」の恵みは、イエス様と私の一対一の関係に留まるものではなく、イエス様を中心にして繋がっている生者と死者皆が、一緒に与っていることを忘れないようにしたいものです。そんなことを考えると、寂しさは否めませんが、私にとつて、母はこれまで以上に身近な存在になったような気がします。

この原稿を認めている時点では、いつコロナウイルスが収まって普通の生活に戻れるのか、皆目見当が付きません。しかし、それでも私たちは皆イエス様のうちに一つに繋がっています。イエス様は私たちの苦しみや悲しみを「ご存知です。私たちがのために復活してくださったイエス様にすべてを委ね、この試練の時を乗り越えていきましよう。」

成し遂げられた

ナルソン
音流村・バルバロナ

「成し遂げられた。」これはイエスが十字架の上で亡くなる前の最後の言葉で

す。主がこうおっしゃったのは、自分が三日目に復活することを知っておられたからです。キリストの復活とは、キリストと共に生きる新しい人生、大きな希望、感謝と愛のことです。

イエスは死を打ち負かし、聖霊によって永遠に生き、私たちと共におられるようになりました。イエスは地上での使命が成し遂げられたことをご存知でしたが、ご自分の過越を記念する聖体祭儀を通して、地上にご自分の肉体がない今も働き続けておられます。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、「成し遂げられました」が、私たちの苦しみと憎しみに満ちたこの世界での生活はまだ終わっていません。不確実性と混乱にもかかわらず生き続けるために、キリストの復活を私たちの心の源にしましょう。また、キリストの復活を、私たち自身の十字架を担う力とし、最後の日を目指して、私たちは傍におられるイエスと共に、様々な苦しみを乗り越えていかなければなりません。

復活のメッセージは、愛が死を征服したということです。また、神の民への愛

と私たちの救いのために、御ひとり子が自分の命を捧げられたということでもあります。私たちは、いのちの豊かさと愛を保ちながら今の旅を続けましょう。

今こそ、私たちへの不滅の愛を主に感謝する時です。私たちは神の掟に反して罪を犯す時、どんな罰をも受けるに値しますが、神は、家族の幸せに関心を持つ父として、この地球上のご自分の民を心にかけて、愛しておられます。神の期待にふさわしく応えるように日々努力いたしましょう。

復活祭おめでとうございます。

「いと幸いな受難」

トゥ・ダン・フック

主のご復活おめでとうございます。

キリスト教で言う「ご受難」は、キリストが捕らえられて十字架にかけられた苦難を指します。受難は文字どおり苦難を受けるという意味で、論理的に表現すれば「残酷な受難」、軽くても「大変な

受難」といった方が正しいでしょう。しかし、矛盾に聞こえますが、キリスト者はイエスの受けた苦難を「いと幸いな受難」と言い換えることができます。なぜならキリスト者は、イエスの受けた苦しみだけに目をとめるのではなく、むしろ十字架の苦難を越える三日後の復活に目を注ぐからです。イエスは、傷や侮辱を通じて勝利をもたらしてくださいました。

かつて十字架は、古代ローマでの最も残酷な刑罰の手段でした。そしてキリスト教的な表現で使われる十字架という言葉は、徐々に人生の理不尽なことを意味するようになっていきます。また、イエスは「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（ルカ9章23節）と弟子たちを招きました。聖金曜日には十字架の崇敬式が行われます。当然ながら、キリスト者はただ苦しみという十字架を崇敬するのではなく、またイエスは弟子たちに苦しみを勧めているわけでもありません。むしろ十字架に刻まれた限りない愛を礼拝するわけです。

特に四旬節中に行われる十字架の道行

でも、イエスが墓に葬られる第十四留にとまらず、近年、イエスが復活するという第十五留まで設置する教会が多く見られます。その設置の配慮は神学的にとっても良いことでしょう。

また、同じ理解により、復活徹夜祭で歌われる『復活の賛歌』の中では、かつてアダムの犯した過ちも「幸いな罪」と呼ばれています。死の暗やみが打ち払われ、勝利の光が輝き出します。人間のあやまちは大きかったですが、イエス・キリストの十字架によってもたらされる勝利はアダムの罪よりも遙かに大きいのです。キリスト者として日々の苦難を越えて、イエス・キリストの復活のいのちに生きることができそうです。

復活祭メッセージ

ロベルト・ソリス

弟子たちが信じるように復活されたイエス様が何回現れたかご存じでしょうか。聖書にはつきり書かれていませんが、聖

書の記録上は約十二回です。ただ実際はそれだけではなかったと思います。なぜなら復活したイエス様が四十日にわたって弟子たちに現れ、神の国について話されたからです（使徒言行録1章3節）。それは不思議なことではないでしょうか。

旅する教会がイエス様のご復活を証しすることは、多様な価値観を求める現代社会では大変大きなチャレンジだと思います。確かに私たちは復活のイエス様を実際に目にしたわけではなく、弟子たちのようにイエス様を触ったこともないでしょう。しかし、イエス様が建てられた教会の交わりの中でイエス様は生きておられるという手応えを感じ、信仰しているのではないのでしょうか。二千年前に復活したイエス様の現われがなければ教会が成立しない、という認めざるをえない事實は、相対主義的な社会にある教会にとって是不可欠な力と恵みです。聖パウロもこう主張しています。「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠

りについた人たちの初穂となられました」（二コリント15章17―20節）。

証しする教会の役割は、復活されたイエス様の手応えを感じながら生活していくことではないでしょうか。日常生活の中でイエス様の導きと助けを感じ、耐え難い試練の中にありながらも神の摂理を受け取るということです。このように、生けるイエス様が共におられるという実感の下、その確かさに依り頼んで生きていくことこそイエス様のご復活の証人の生活ではないでしょうか。この実感の中で、それが単なる文字で書かれた教えではなく、まさしく私たちに語ってください。神の言葉であることも実感されてくるわけです。私たちがイエス様の復活の恵みによって、イエス様の復活を証しする者になりますように、心より主のご復活おめでとうございます！



ヴェロニカの瞳

後藤
文雄

眼が疲れやすくなった。本を読む気にもなれず、無為に天井を見ていたら、着実に迫ってくる死に慄然する。

そんな時には、ルオーの「キリスト聖画集」を開く。ぶ厚い画集に「ヴェロニカ」を探す。彼女に出会おうと、ほつとする。その瞳は黒くぬりつぶされているようにもみえるのに清楚な顔である。その瞳の中に、十字架の重さに打ちのめされながらゴルゴタの丘に向うキリストのみ顔が浮かんでくる。他の画家が描くヴェロニカは、必ずみ顔が写し出されているヴェールをかざしている。しかし、ルオーにはそれがない。

ものの本によると、ヴェロニカという聖女は伝説上の人物だという。「十字架の道行き」第六留には歴然と彼女がイエスからヴェールを受けとっている。血みどろのイエスに同情して涙を流しながらそのヴェールにはイエスの顔が写し出さ

れているのである。

伝説上の人物であってもなくても、全世界のカトリック教会の聖堂の壁にかかげられている十字架の道行きの第六留には、ヴェールをかざすヴェロニカがかかげられている。

ルオーの描く「夕暮れ」は、私自身が人生の夕暮れを実感しているせい、心にしみ入る。沈んでゆく太陽、冴える月に照らされる田舎の風景は、ルオーの心象風景なのだろうか。画面のまん中に立つイエス、その左右に立つ婦人の中にヴェロニカの姿を重ねてしまう。勝手に合成された「夕暮れ」に静かな安らぎを感じる。

ルオーの筆先はどんなものなのか、荒々しいタッチを想像するのは、絵には細い線はなく、大胆な太い線で描かれているからである。色彩も暗いものが多い。人間の苦悩や怒りがしみ出ている。そこには、人間同志の無関心に対して怒りをぶつけているように思われる。

イスラエルには何回も巡礼したが、パレスチナ領のガザには行きそびれてしまった。ルオーの心象風景「夕暮れ」に、

私にはニュースの映像や新聞で見るガザの街が重なってしまう。不条理な国際政治に翻弄され、無残に破壊されつくされた瓦礫の街角が痛ましい。特にそこに住む子どもたちや婦人たちの苦しみや悲しみに胸がつぶれる思いである。それは、終戦直前の爆撃による私の家族喪失体験が今もつてうずいているからである。

一昨年、ルオーの「ヴェロニカ」の実物に出会うことができた。ヴェロニカは、伝説上の人物だが、世界中のカトリック教会の聖堂の壁にかかげられている「十字架の道行き」第六留で自分のヴェールをイエスに捧げているのは、ルオーの描いているあのヴェロニカだ。その瞳にくつきりとイエスの聖なるみ顔が写っているのだ。しかもその瞳の奥に重複して、復活のイエスのみ顔がうかび上ってくるのである。



聖霊の息吹

韓国からこんにちは④

出会い

聖霊奉侍布教修道女会

町村 治美

今回は、前回少し紹介した週一でボランティアをしているフランシスコ会（O・F・M）の食堂についてお話ししたいと思います。ボランティアはだいたい9時から始まってブラザーを中心に15名前後で昼食の準備をし、ミサを捧げてから開店をします。開店は12時からですが、朝から店外に行列ができるほどの美味しい食堂です。現在、日に300名ほどお客様がいらっしやいます。2時半には閉店し、掃除をした後ミーティングでその日の感想を分かち合います。定休日は日曜日と水曜日で、クリスマスも開店する貧しい方々のための食堂です。

さて、ボランティア活動の中でもある大先輩との出会いは私にとって大きな宝

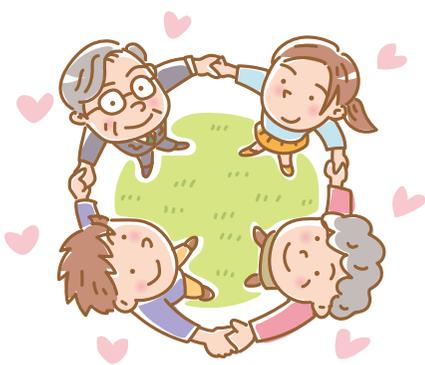
物です。今年88歳になる彼女は、30年近くほぼ毎日、ボランティアを続けてこられ、あることを契機に3年前に洗礼を受けられました。彼女はご自宅から誰よりも早くボランティア先に到着して、ボランティアの活動中でも人の嫌がる仕事を率先してなさる方です。最初出会ったときは彼女の独特のアクセントや少々男勝りな態度に近づきがたさを感じていたのですが、今では会うと、お互いに手を握り合って「お元氣でしたか？」とお互いに配慮する間柄です。

人間的にとっても温かくて笑顔が素敵な彼女でありながら、奉仕をしながら分かち合ってくださった彼女の人生は決してバラ色の人生ではありませんでした。とりわけ彼女の幼少期は苦難の連続でありました。一度ジャガイモの皮剥きをしながら、彼女の体験した日本の植民地支配について話してくださいました。私の韓国語の理解力ではその内容を到底理解することができなかったので、もう一人一緒にいたボランティアの方に英語に翻訳してくれるように頼みましたが首を振るばかりで、私もその時はただ

ひたすら苦しみが癒えるようにと祈るしかありませんでした。しかし、不思議とこの出来事を契機に彼女と私は仲良くなり、私は韓国の人たちの話を聞かなければならないと思つて、韓国語の勉強にも一層力が入るようになりました。

日本人である私を心から受け入れてくれた彼女の懐の深い力強さは、私にとつて忘れられない大切な学びです。これからも日々の出会いを大切にしながら、韓国での奉仕を続けていきたいと思つています。皆様のお祈りに感謝をささげつつ。

御復活おめでとうございます。



神学院からの随想③

「自分なりのペースで」

神言修道会神学生

傍島義雄よこしまよしお

皆さん、お久しぶりです。東京周辺は今、どのような様子でしょうか。お元気でいてくださるとうれしいです。

この原稿を書いている時期に、私たちの神学校では、終生誓願式と助祭叙階式の準備が少しずつ進められています。私は今回の対象者ではないのですが、全体のまとめ役としての「総務」の仕事しながら、経験を積ませていただいています。今回は、その仕事をする中で、自分が感じていることを書いてみようと思います。

今回、私たちの神学院の中で叙階に向けて準備をしている候補者は五人いて、この原稿が皆さんのもとに届く頃には、その五人は助祭になって働きながら、十月の司祭叙階に向けて準備をしているこ

とでしょう。実はその五人のうち二人と、私は五、六年前に一緒に修練期を過ごし、初誓願も一緒に立てました。私は二年以上、ガーナに研修で行っていたので、その分の神学の勉強が残っており、終生誓願と叙階についてはもう少し後になります。でも、初誓願を同時期に立てた彼らが、間もなく受ける叙階に向けて準備している姿を見てみると、自分にもそのような時が近づいてきているのだとしみじみと感じます。

まだまだ神学生として新人で、分からないことばかりという感覚でいたら、実は自分が神学校に入ってからもう八年目になっていることに驚いてしまいます。年齢の方も四十代に入りました。宣教師として働いていくための教養や精神力、体力や信仰を、十分に蓄えてきているだろうか、焦りのようなものを感じてしまったりときもあります。少なくとも、国際的、異文化的な環境の中で生き抜いていく力は、徐々に身につけてきているように思います。日曜日に教会を訪れると、「あと何年ですか」とか、「いつになりますか」などと、司祭になる時期について

よくきかれます。「お恵みあればあと数年です」、「自分なりのペースでやっています」などと答えます。

私たちは、いろいろな人々の支えと祈りの中で、いろいろな人々とのかわりの中で宣教師として養成されていきます。毎年、共同生活を送るメンバーが少しずつ変わりますし、日曜日にどこの教会に派遣されるかも変わります。年度のはじめは、その変化に戸惑うことがあるかもしれませんが、状況が変化していく中で、新しい出会い、新しい人間関係を楽しみながら、自分なりのペースで、召命の道を歩みつづけたいと思います。皆さまは、その人に合ったペースで導いてくださるでしょう。



教皇フランシスコの使徒的勧告『福音の喜び』

2章「危機に直面する共同体」について熟考すること（後）

教皇フランシスコにとって、これらの課題の原因の一つは、私達のお金との関係性と、権力・支配への静かな渴望の中に見出されます。もしあなたがお金を持つているならば、あらゆる意思決定を制御したり、影響を与えたりすることができます。もし、あなたが、ある共同体や集団を組織化しようとする、そこには常に、さまざまな計画を操作して、その共同体のあらゆる構成員に圧力をかけるといふ傾向が存在します。肉眼では見えなくとも、それは、行動とある種の状況を通して感じることができます。

個人間の違いと社会文化的なさまざまな違いは、一部の人が自分の特権を手放すことができな理由の一つとなる可能性があります。この場合、多くの団体が、教会という外套の中に、自分達の目的を紹介するために現れて、慈善団体であることをアピールしますが、実際は金

儲けが行われます。そこには、教会に通う人の純粹さと寛大さを用いながら、彼らの社会的な利益を増大させていることに気づかず教会が利用される場合もあります。

異なる文化や個性に取り囲まれた都市部を福音化する際には、多くの困難が存在します。教皇フランシスコは次のように記しました。「多くの民族のカトリック信仰は、今日、新宗教の広がりという課題に直面しています。これら新宗教は、あるものは原理主義的な傾向をもち、またあるものは神なしの靈性を提示しているように見えます。これは、一方で唯物主義的・消費主義的・個人主義的な社会に対する人間らしい反応であり、他方で隅に置かれ、貧しくされたところで生きる人々の欠乏を利用するものです。このような人々は、人間としての大きな苦しみの中で生き延び、自分たちの必要をす

ぐに満たしてくるものを求めています」。

世俗主義は山火事のように広がり、カトリックの生活に影響を与えています。キリスト信者達は、この現代世界の中で、多くの人々があらゆる形態の宗教や宗教的団体の所属から、自分自身を切り離そうとしていることに気づく必要があります。この状態を受けて、家庭そのものから教育を始める必要があります。そして教育とは、家族を、共同の奉仕と活動に従事することへの方向性を見失わせないようにすることです。この世代の中に起こっている問題の一つは、家族の関係性の中にはつきり見られます。一つの家族を形成することは、一つの共同体を形成することです。別の言葉で言えば、自分達の固い信仰とより良い関係を持つている家族は、信仰に基づいたより良い共同体を形成するのです。

世俗主義のほか、教会から離れるもう一つの要因は個人主義です。より多くの個人が、自分の人生に、より多くのものを望んでいます。社会化、生活様式、お

金と権力は、家族や共同体だけでなく、人と人との間のきずなも弱めます。これは家族のきずなを変化させます。教皇フランシスコにとっては、「司牧活動においては、父なる神とのつながりが、人と人との間のきずなをいやし、促進し、強める交わりを求め養うということを示さなければならぬ」です。日本の場合には、仲間からの圧力、いじめ、孤独、仕事、家族のきずなその他の要因が、人々の相互の交わりを妨げています。その結果、挫折や失望が生じ、人の大切な命が犠牲になることもあります。この複雑な状況下では、私達は、危機の時はいつでも、互いの助けの手を必要としています。そのため、私達は、他の人々を尊重するため、傷を癒すため、架け橋となるため、さまざまな関係を強化するため、また、「互いの重荷を担う」（ガラテヤ6…2）のために、キリスト教の価値観を再確認して、これらの価値を他者と分かち合わなければなりません。

この春、松本主任司祭は愛知県の長浦教会へ、ネルソン助任司祭は長崎の西町教会に転任となり、吉祥寺教会には以下の神父様方が着任されますので簡単にご紹介します。

主任司祭 ビジュ・アウグスティン・キシヤケール神父様



南インド ケーララ州出身
2002年 司祭叙階
西町教会助任（兼小学校・幼稚園）、長浦教会主任（兼幼稚園長）
2018年4月～2020年3月 土崎教会（秋田）主任

助任司祭 ボスコ・マニマラ（ボウス・ジェームス・ヴェルラップラムリイル）神父様



南インド ケーララ州出身
1982年 司祭叙階
2003年3月～2019年3月 来日後、南山大学経済学部にて英語教師として勤務。
2019年3月末で南山大学退職

■事務室受付時間（通常）■

日曜日 9:00～18:00
火～土曜日 9:30～18:30

※定休日：月曜日・祝日

■売店営業時間（通常）■

火～日曜日 10:00～18:00

※定休日：月曜日・祝日

■ミサ時間案内（通常）■

主日：7時・9時（日曜学校）
10時30分・12時・18時
*第1日曜16時（英語）
*第3日曜16時（タガログ語）
平日：7時/金曜：7時・12時
土曜：7時・16時（主日のミサ）

（上記受付時間、売店営業時間は変る場合があります）